

自然共生の工業基地、 苫東環境コモンズの挑戦

〜苫東の新たな価値創出を目指して〜



工業基地として知られる苫小牧東部地域（以下、苫東）は、広大な緑地や湿原がある、自然と共生するインダストリアルパークを理想として1970年代に計画されました。しかし、苫東開発の事業主体であった苫小牧東部開発株式会社の破たんにより、緑地空間はその後十分な管理がなされていない状況でした。

こうした中、2010年1月、苫東に残る雑木林や湿原などの緑地を保全しながら有効に利活用していこうという「特定非営利活動法人苫東環境コモンズ」が設立されました。共有地・入会地を意味するコモンズの発想を取り入れ、地域の宝として見直されている自然資源を有効に利活用し、苫東地域の価値を高める取り組みとして注目されています。

緑豊かな工業基地を目指した苫東

苫小牧東部工業基地は、1970年にスタートした第3期北海道総合開発計画に基づいて計画された大規模プロジェクトです。'71年に基本計画が策定され、翌年に実施主体として苫小牧東部開発株式会社（以下、旧苫東会社）が設立されました。基本計画では、敷地面積11,250haのうち約3割を占める3,400haを緑地等としており、「山林原野の一带は、おおむね公園緑地としての利用に供するものとし、すぐれた自然環境を保存」することが大きな特徴でした。

当時、国内では、さまざまな公害問題が表面化しており、'70年12月に公害関係14法が公布されたばかりの時代です。そのような中で、苫東は公害のない緑豊かな工業基地として、新しい時代の理想的な工業地域を目指していました。

その後、経済社会情勢の変化の中で、想定していた大規模な基幹資源型産業等の立地が進まず、'95年に新計画を策定したものの、実施主体の旧苫東会社

の借入金が増え、さらに'97年11月に北海道拓殖銀行の経営破たんを機に債務の延滞という事態に陥りました。旧苫東会社は'98年に清算され、借入金に依存しない形で、苫東地域の土地保有や造成、分譲を行う新会社として、'99年に株式会社苫東が設立されています。

現在、新会社が管理する敷地面積は約10,700haと支笏湖（7,800ha）の面積よりも大きな空間で、このうち緑地は3,200haです。旧苫東会社では、緑地管理を担当する専任職員がいましたが、新会社ではスリムな体制で経営を行っていったため、以前のように十分な緑地管理体制は組めなくなり、具体的な保全計画もない状況でした。

貴重な自然資源と実験の場

苫東敷地内にある広大な緑地空間は、貴重な自然資源であることを以前から認識していた人は少なくありません。例えば、苫小牧市森林組合長を務めた故・蔦森春明氏は、用地の譲渡に当た



池の前に設置されているつた森山林の看板

て、森の価値を継承し、工業用地で有効に活用することを条件にしたといわれています。現在、この用地は、通称「つた森山林」と呼ばれ、その隣接地で'07年の全国植樹祭が開催されました。つた森山林は苫東緑地の拠点となっており、林道はフットパスにも活用されています。樽前山に沈む夕日を見る最適地でもあり、蔦森氏の思いは引き継がれてきたといえます。

また、厚真町との境にある通称「コナラの雑木林」は、女性的な柔らかな表情を見せるコナラが中心で、ミズナラが多い他の道内の林とは一味違った景観を見せています。コナラとミズナラが混じり合った広葉樹2次林であり、専門家によればコナラ中心の大きな群落としては苫東が北限なのだといえます。



図1 苫東緑地の配置とNPOが提案する利活用可能性ゾーン

※ フットパス
森林や田園地帯、古い街並みなど、地域にある風景を楽しみながら歩くことができる小径（こみち）のこと。発祥地のイギリスではフットパスが網の目のように広がっている。近年は日本でも見られるようになり、北海道でも根室、南幌、黒松内など20カ所ほどフットパスがあるといわれている。

苫東の敷地を回ってみると、雑木林、湿原、火山灰地、自然海岸の地形地質など、多彩な自然環境があり、野鳥は200種以上、工業基地の敷地であることを忘れてしまうほどです。地球規模で環境問題が語られる時代になって、こうした貴重な自然環境を改めて評価する人は少なくありません。

一方、旧苫東会社の時代には、広大な面積のため、できるだけ費用をかけずにインパクトのある美しい景観づくりを目指して管理されてきた経過があります。'81年に台風によって風倒木被害を受けたエリアがありますが、「植えない森づくり」と称して、造林せずに自然復元させるなど、広大であったがゆえに実験的な森林管理も行ってきました。メンテナンスフリーなどコストを抑えた緑地管理の事例として、ヒアリング調査の対象になったこともあり、森林管理、緑地管理といった面では、ある意味実験の場であったともいえます。

「コモンズ」の発想が浮かび上がった経緯

こうした延長上で、苫東の緑地管理に広く市民がかわる仕組みが見られるようになっていました。

国有林を火災から守るために地域で結成される任意団体に森林愛護組合がありますが、当初、苫東では山火事防止のための特別な組織はありませんでした。そこで、'88年に苫東緑地の火災予防のほか、工場などの緑化推進や緩衝緑地などの森づくりを推進しようと、苫東に立地している企業などが構成員となって「苫東地区森林愛護組合」が結成されました。組合では植樹会に代わる育樹会などを開催して森づくりにも取り組んでいましたが、'97年に市民参加型の育林コンペを企画します。コナラの雑木林の0.5haをチーム単位に割り当て、その手入れを3シーズン担当してもらい、出来栄を美しさや植生などで競う形式で森づくりにかわってもらうもので、苫小牧や札幌の森林愛好家ら6チームが参加しました。

また、苫東北部の安平町遠浅地区には、旧所有者の姓を冠した通称「大島山林」がありますが、'95年からその一部を住民組織である遠浅町内会が自主的に管理



遠浅町内会の自主的管理は苫東環境コモンズの実質的なはしり。写真はごみ拾いをしている町内会メンバーと町民の談話風景

しています。約70haの山林のうち、かつてアヤマが生んでいた池周辺を地域の公園に活用し、冬は林道を歩くスキーコースに活用するなど、暮らしに密着した形で利活用されています。

育林コンペに参加したグループや森づくりに興味がある人、雑木林が好きな人などがファンクラブのような存在になり、苫東を訪れて森の手入れを体験する機会も見られるようになっていきました。

'98年に旧苫東会社が破たんしたことで、以前のような緑地管理はできなくなりましたが、市民やファンなどによって、新しい形での緑地管理がなされていたといえるでしょう。

苫東の原野に広く自生する^{かん}灌木ハスカップ（和名：クロミノウグイスカグラ）の実を採りに訪れる人たちも多く、ハスカップ摘みは初夏の勇払原野・苫小牧の風物詩になっていました。また、苫東の敷地で散策を楽しむ住民もいました。このように、既に苫東ではさまざまな入会的な利活用が積み重ねられてきています。

こうした取り組みを整理する概念として浮かび上がってきたのが「コモンズ」でした。コモンズという言葉には、土地利用を所有権によって排他的に行うのではなく、多くの人々の秩序ある利用が共存することで土地空間の価値を高めていこうという思いが込められています。苫東の貴重な自然資源空間を地域・圏域の住民が重層的に利活用することで環境を保全し、これによって価値を高め、地域の持続的な発展に結び付け

ていくことが可能になるのではないか。こうした考え方が「特定非営利活動法人苫東環境コモンズ」設立を後押しします。土地の所有者は苫東会社ですが、その自然環境や空間は「みんなのもの」として「みんなで利活用」し、それが環境保全にもつながっていくと考えているのです。

NPO法人の設立に向けて

コモンズの発想や法人設立の中心人物は、NPO法人の事務局を務める草苺健氏です。現在は(財)北海道開発協会開発調査総合研究所で主任研究員をしている草苺氏は、旧苫東会社の緑地管理の専門技術者であり、同社を退職後も週末ごとに苫東の山林の手入れをボランティアとして続けてきました。'98年には「雑木林&庭づくり研究室」という個人ホームページを立ち上げ、苫東の雑木林などさまざまな情報を発信してきました。苫東環境コモンズの出発点は実はここにあります。現役時代に雑木林の管理センターとして活用していたログハウスを譲り受け、そこを拠点にして森林美に配慮した間伐を



草苺氏が苫東の活動拠点としているログハウス



柏原地区のフットパス

行ったり、フットパスを整備するなど、利活用策を考えながら活動を続け、ホームページ閲覧者から苫東を訪問したいというメールが来れば案内役も務めるなど、苫東緑地の管理と利活用を自ら実践してきました。

2008年度に(財)北海道開発協会開発調査総合研究所内に「環境コモンズ研究会」(座長：釧路公立大学小磯修二学長)が発足しますが、草苺氏は研究会の事務局も務め、関係者との連携や調整に当たってきました。研究会ではNPO法人設立をにらみ、NPOが対象



「苫東環境コモンズがめざすもの」では、小磯座長の報告と(財)北海道環境財団理事長の辻井達一氏の基調講演の後、パネルディスカッションを実施。会場にはあふれるほどの参加者が集まった

として考えている苫東緑地の利活用ゾーンやメニューの検討を行い、'09年9月19日には研究会の成果を報告する形で、基調報告と講演、パネルディスカッションを組み合わせたフォーラム「苫東環境コモンズがめざすもの」を苫小牧市サンガーデンで開催しました。NPO法人設立に向けて、広く市民に認知してもらおう意味合いがありましたが、予想を超える申し込みがあり、苫小牧市外からの参加者も多く見られました。このような議論を経て昨年10月に設立を申請したNPOは、'10年1月4日に「特定非営利活動法人苫東環境コモンズ」として法人認証されています。

「新たな公」の役割を担う

今後、NPO法人ではミズナラ・コナラ林などの環境保全事業、緑地の利活用、そして環境保全にかかわる調査研究などを行っていくこととしています。

環境保全事業では、趣旨に賛同してくれる人たちとともに緑地の手入れを行い、貴重な自然環境を次代に引き継いでいきます。既に札幌で活動する森林ボランティアグループが協力や交流を検討していますが、この事業の中では、森林づくりの担い手育成という役割も果たしていくことが考えられます。

また、緑地の利活用では、既に利活用が進んでいるフットパスの整備、さらには毎月気軽に苫東の隠れた名所を探访するウォーキングなどが検討されています。コナラの雑木林は、その癒し効果が医療関係者に注目されていることから森林セラピーの場としての利活用

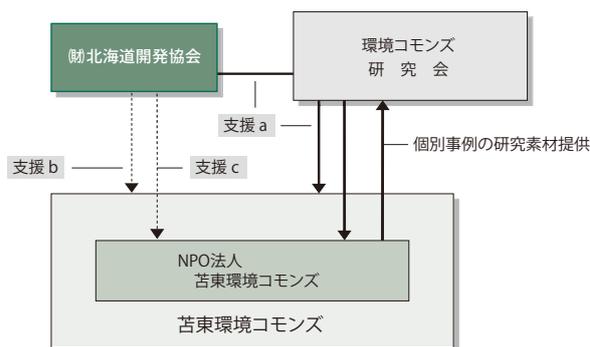


図2 研究会とNPOの連関図

も期待されます。

調査研究では、研究者や学生などの協力を得ながら、ミズナラ・コナラ林の持続的な保全方法などについて活動を行うほか、ヒグマの移動情報把握などの情報収集などが検討されています。

こうした活動を通じて、NPO法人には広大な苫東緑地の利活用と管理を調整し運営する組織として、「新たな公」の役割を担うことが期待されています。NPO法人は、環境コモンズという概念を勇払原野という地域にあてはめながら、まず、土地の所有と利用について関係者間の合意形成を図ります。次のステップでは、自然環境の利活用の仕組みづくりを実験的に行っていきます。一方、研究会は、この試みに対して専門的な立場から検討しアドバイスしながら、環境コモンズの現地で展開される動きの中から北海道各地でも応用できる新たな土地の利活用方式や考え方を提言していきたい考えです。

新たな時代に地域の連携で苫東の価値を高める

苫東周辺には、動植物の宝庫、野鳥の楽園と呼ばれるウトナイ湖、その水源であり原始河川としての姿を残している美々川などがあります。また、森をテーマにしたガーデンと自然体験プログラムを提供している「イコロの森」や北大研究林も近く、勇払原野を舞台にさ

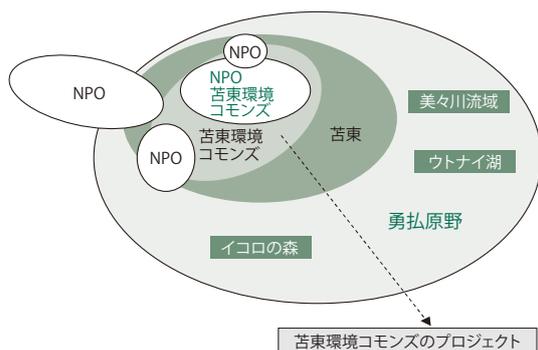


図3 NPOと勇払原野・プロジェクト等のつながり

まざまな環境保全活動が行われています。共通の認識を持つ団体などと連携することで、重層的な活動の広がりとなり、環境コモンズの先進事例につながっていくといえるでしょう。

これまで「苫東」という言葉を聞くと、旧苫東会社の破たん引きずられて、マイナスイメージを持つ人もいました。しかし、時間が経過し、新たな公の役割を担う環境コモンズという仕組みが定着すれば、新しい苫東の役割として評価されることになるでしょう。新たな時代に地域の連携で苫東空間の評価を高めていくことは、地域全体の価値を高めていくことにつながります。その実験的な取り組みは、第7期の北海道総合開発計画が掲げる「新たな北海道イニシアティブ」として北海道開発政策の推進に寄与するという意義もあります。

研究会の座長を務める小磯学長は、「苫東環境コモンズの取り組みは、苫東という空間を新しい発想と仕組みによって価値を高めていくことにつながります。これからの持続的な地域社会づくりに向けては、独占的な土地利用から地域連携による柔軟な利用によって地域空間の価値を高めていくことが大切です」と、重層的な仕組みづくりの重要性を主張します。また、草薙氏は「この活動は住民・企業・行政がパートナーシップで、里山のような身近な環境を整備・改善するグラウンドワーク的な活動として根付いていくことで、他地域でも取り組める参考例になるのではないかと思います。そして何よりもこの取り組みは、苫東という工業基地の付加価値を増すことにつながります」と語ります。

森林という資源をどのように地域再生に活用していくのか。まさにそれを実践していこうとしているのが苫東環境コモンズの取り組みといえます。また、人口減少時代の中で、新しい土地管理、森林管理のあり方を探る実験でもあります。動き始めたばかりのNPO活動ですが、新しいモデルを提案できるような取り組みとなっていくことが期待できます。